

「ピアノの詩人」の異名を持つショパン。彼は生涯にわたって円舞曲を作曲した。

それら珠玉の作品群は、広く愛され、今なお私たちを魅了してやまない。

ベートーヴェンは、生涯で32曲のピアノ・ソナタを作曲した。時期により大きく性格を異にするこれらソナタは、

彼の創作史においても重要な役割を果たしたのみならず、

「ピアノの新約聖書」とも称され、音楽史の金字塔として燦然と輝いている。



Program Note

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第20番 ト長調 作品49-2

Beethoven, Ludwig van: Sonate für Klavier Nr.20 G-dur Op.49-2

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo 1.Satz Allegro ma non Troppo

第2楽章 テンポ・ディ・メヌエット 2.Satz Tempo di menuetto

このソナタは20番という番号を持ちながら、比較的ベートーヴェン初期の作品である。1795年頃に作曲され、1805年に19番のソナタと共に「2つのやさしいソナタ」というタイトルで、ウィーンで出版された。

この楽曲は2つの楽章からなっている。ソナタ形式の第1楽章と、「メヌエットのテンポで」と題されたロンド形式の第2楽章である。いずれの楽章も明快で愛らしい主題を持ち、親しみやすい作品となっている。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第8番 ハ短調 作品13「悲愴」

Beethoven, Ludwig van: Sonate für Klavier Nr.8 c-moll Op.13 "Pathétique"

第1楽章 グラーヴェ アレグロ・モルト・エ・コン・ブリオ 1.Satz Grave-Allegro molto e con brio

第2楽章 アダージョ・カンタービレ 2.Satz Adagio cantabile

第3楽章 ロンド・アレグロ 3.Satz Rondo-Alleg

ベートーヴェンの三大ソナタのひとつとして名高い《悲愴》は、紛れもなく初期の最高傑作である。初版表紙の「大ソナタ悲愴 Grande sonate pathétique」が表題の由来であり、ベートーヴェン自身が付したタイトルでもある。

調性にはベートーヴェンが好んだハ短調が選択され、当時では画期的なまでに長大な序奏が置かれている。この重厚な序奏により、第1楽章は独特の構成となっている。続く緩徐楽章はこの上なく美しい旋律を持ち、終楽章はロンドとなる。これらの楽章に動機的連関を持たせることで、ベートーヴェンは作品全体に統一性を与えた。

ショパン：3つのワルツ 作品34

Chopin, Frederic: 3 Valses brillantes Op.34

第2番 変イ長調 Op.34-1 No.2 As dur Op.34-1

第3番 イ短調 Op.34-2 No.3 a moll Op.34-2

第4番 へ長調 Op.34-3 No.4 F dur Op.34-3

この3つのワルツは「華麗なる円舞曲」の名前でも知られる。

第2番は、舞踏会の雰囲気を表したような華麗な曲想が特徴。序奏に続き、性格の異なる3つのワルツからなる1部と2部、コーダを持つ。ワルツ間には動機の連関がちりばめられており、構造的で緻密な作品。

第3番は、ショパンの出版された円舞曲の中で、唯一短調の作品である。ウィーン滞在中に書かれた。暗く陰鬱な情感をたたえている。

第4番は、ショパンの弟子であったデクタル男爵の令嬢に献呈された。「猫の円舞曲(ワルツ)」とも呼ばれ、軽快で明るいサロン風の作品。

ショパン：2つのワルツ 作品69

Chopin, Frederic: 2 Valses Op.69

第9番 変イ長調 Op.69-1「告別」 No.9 As-Dur Op.69-1 "L'adieu"

第10番 ロ短調 Op.69-2 No.10 h-moll Op.69-2

第9番は「別れのワルツ」として知られ、ドレスデンで出会ったヴォジンスキ伯爵令嬢マリアとの恋の思い出に捧げられた作品。甘く感傷的な雰囲気を持つ。優雅な旋律はどこか憂鬱な趣をたたえている。

第10番はショパン19歳の時の作品。まだパリの社交界を見ぬ若きショパンの筆は、故郷ポーランドの舞踏マズルカの匂いを漂わせる。中間部を持つロンド形式。感傷的な主要主題と、明るい第二主題が対照的。

ショパン：ワルツ第1番「華麗なる大円舞曲」 作品18

Chopin, Frederic: Grande valse brillante Op.18

ショパンのワルツ中とりわけ高い人気を誇るこの作品は、作曲者の生前はじめて出版された円舞曲でもある。

ウィーン風ワルツの影響が色濃く、舞踏曲らしさが全面に押し出されている。ファンファーレのような序奏で幕を開け、歯切れの良いワルツのリズムに、華やかな旋律が歌われる。

Beethoven